（別紙2）

審査の結果の要旨

氏名　伊藤亜紗

本論文は、ポール・ヴァレリーの詩論・芸術論を、作品として残された詩、公的に発表された講演・記事・対話編、そして膨大な量の私的ノート『カイエ』をテクストとして再構成しようとするものである。従来のヴァレリー研究はおおむね、詩作品を純粋に文学的な内容分析の対象として扱うか、創造ないしエクリチュールの産物として制作学的な分析の対象として扱うかのいずれかであった。これに対して本論は、詩作品を読者の身体的・生理的諸機能を開発する「装置」と捉えるヴァレリーの視点に注目し、そこに想定されている詩論と生理学という一見奇妙な結びつきを、かれの時間論と身体論を媒介に解明しようとするものである。この点をとりあげた研究はこれまでなかったわけではないが、これに一貫した解釈を試みた点に本論文の独自性がある。

本論文は3部からなる。第1部では、作品が単に伝達の手段ではなく、読者に対して日常の自動化した活動の陰に隠れた身体の潜在的な能力を新たに開拓し組織しなおすことを促す「装置」であることを示す。また、あらたな身体機能を開発する装置としての詩作品がもつべき「仕掛け」として、ヴァレリーの作品にしばしば用いられる一人称の語りのモード、代名詞の両義性、倒置法に代表されるような散文的秩序の攪乱といった言語的現象が詳細に検討される。第2部では、時間芸術としての詩と、時間的な変化の中で生じる身体活動をつなぐ契機として、ヴァレリーの時間論が主題的に取り上げられる。ヴァレリーの時間論にとって重要なのは、「予期」とそれに応じた身体のそのつど特定の「身構え」であり、これを攪乱する「不意打ち」であり、そこに生じた「ずれ」を受けとめる「注意」であり、注意が続くあいだ意識される「持続」である。このプロセスのなかで身体の各機能はそのつどの「ずれ」の持続を修正するべく自己調整をおこなうが、調整が成功するとき、そこに調和としての「リズム」が生じる。日常の散文とは異なって詩はまさにこうした「ずれ」の持続と調和の「リズム」の創造にかかわる。第3部は、詩が読者にもたらす身体の能動的な活動の内実を見きわめる。ヴァレリーは我々の生の実体を生理学上の多様な諸機能のシステムの総体と考えるが、日常的な活動においてはその全ての可能性が現働化されているわけではない。この潜在的な能力の総体をかれは「錯綜体(Implexe)」という独自の用語で名指すが、詩とは日常の自動性の下で抑圧されている潜在能力を最大限引きだし、我々が自分の内部にある隠された機能を所有するための装置だというのである。そこから本論文は、ヴァレリーの生理学としての詩論は狭義の詩にとどまらず、音楽や建築を始めとして芸術一般に敷衍され、さらには日常生活の自動性をこえて生きることの詩にも適用されうるものだと結論する。

本論文は、『カイエ』のように膨大かつ錯綜したテクスト断片をもたんねんに解釈する作業を通じて、ヴァレリーの詩の生理学という特異な考えかたをきわめて明晰かつ説得的に展開することに成功している。身体的・生理学的能力を開発する「装置」というヴァレリーの「純粋詩」の考えかたが芸術一般に敷衍されるとき、日常生活の散文的な「意味」をもふくめた芸術のさまざまな「内容」がどう評価されるのかといった、より一般的な芸術論の問題にかんするヴァレリーの詩論の限界や可能性についてはなお今後の問題として残るが、本論文は全体として、ヴァレリーの詩論にあらたな座標を提供するものとして評価することができる。よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。